

Q&A

このコーナーでは、疾病や繁殖への質問、往診時には聞けなかったことや今更聞けないことなど、みなさんの疑問にNOSA I職員がお答えします。

中標津町西竹の男性より

『毎年春が近くなると行う駆虫。ついつい先延ばしにしていますが・・・。
駆虫に関する事をあまり知らないなので、今度ぜひ特集して下さい（利点、薬の種類など）』

この問いに釧路中部事業センター 標茶家畜診療所 鈴木 真生 獣医師が答えます！

そもそも駆虫とは寄生虫を駆除することで、寄生虫は大まかにコクシジウムや主に胃や腸内に寄生する消化管内線虫（以下GIN）などの内
部寄生虫とサシバエ、マダニなどの外部寄生虫に分かれます。春から夏にかけて放牧を始める方も多いかと思いますが、放牧地には多くのGINがいますし、サシバエやマダニにさらされます。そのため、放牧牛に駆虫を行うことは重要で、また利点も多くあります。そこで今回は、放牧牛に行う駆虫についてお話します。

内部寄生虫対策

放牧牛の駆虫には内部・外部寄生虫両方の対策が必要になります。内部寄生虫で使用される駆虫薬は牛の背線部にかけるポアオンタイプのイベルメクチン製剤が比較的投与しやすく主流となっています。しかし、搾乳牛に使用する際は出荷制限がありますので注意が必要ですが、現在では乳の出荷制限期間がないポアオンタイプのエプリノメクチン製剤もあります。またこれらの製剤は同時

に外部寄生虫（疥癬ダニやマダニなど）に対しても効果があります。この他にも経口や注射タイプの駆虫薬がありますが放牧牛には不向きかもしれませぬ。

この駆虫薬のターゲットになるのはGINなのですが、皆さんはGINと聞いてもピンと来ないかもしれません。それは、GINに感染しても明らかな臨床症状を示すことが少ないため治療を行う機会が少なからずです。しかし、多くの放牧地でGINの汚染が確認されており、感染することで牛の栄養状態が悪化し、増体が悪くなります。目に見えた症状はなくても駆虫を行うことで、栄養状態が改善され、増体、繁殖成績の向上、乳量の増加など様々な生産性の効果をもたらすことが分かっています。

では、どのタイミングで駆虫をすればよいのでしょうか？GINは冬の間は発育が抑制され、暖かくなる春先になると発育が始まり感染性を持つ子虫になります、そのため放牧中はいつでもGINに感染する可能性があります。感染性を持つ子虫を

牛が食べると、牛の胃腸内で成長し、成虫となるのですが、この成虫の数が多くなると牛の生産性に影響を与えるといわれているため、成虫数を抑えることが大切になります。駆虫を行わない場合、成虫数は放牧開始時期から9月頃まで急速に増加し、気温が低くなると減っていくため、入牧時または成虫数が増加する入牧後3週間頃に駆虫を開始し、薬剤の効果が薄くなり再度感染が起こりうる時期（イベルメクチン製剤の場合3～5週間）に再度行っていき、退牧時に舎飼いに戻す際に持ちこまない様に行います。

外部寄生虫対策

次に外部寄生虫についてです。前述したイベルメクチン製剤を使用すれば外部寄生虫も同時にコントロールは出来ますが、白血病を媒介するサシバエや小型ピロプラズマ病を媒介するマダニが問題になっている場合や、外部寄生虫による牛のストレスを軽減させたい場合はGINの対策に加えて、外部寄生虫の駆除対策を行う必要があります。外部寄生虫

に対しては比較的長期間効果を持続させられる耳標型の駆除剤（ペルメトリン製剤）があり、これを入牧時に装着させることで外部寄生虫から牛を守ることができます。また、マダニに対しては小型ピロプラズマ病の発症がある場合、ピロプラズマ原虫を持ったマダニを殺さなければ感染を制御できないため、ポアオンタイプ

の殺ダニ剤（フルメトリン製剤）を用いたマダニ対策を行う必要があります。マダニ対策においては、イベルメクチン製剤を投与する時点では、殺ダニ剤の投与の必要がなくなるため、組み合わせで使用することで経済的になります。小型ピロプラズマの発症がなくとも放牧するとマダニが多くつく場合は、牛にとって大きなストレスになりますので、マダニ対策が必要になります。実際に、私の管轄内の公共牧野で小型ピロプラズマ病の発症が多く確認されたため、殺ダニ剤とイベルメクチン製剤と耳標型ペルメトリン製剤を使用した駆虫対策プログラム（図1-a）と調査を6年間実施したところ、牧野内での発症、感染、ピロプラズマ

原虫を持ったマダニの数を抑えることが出来ました。しかし、牧野のマダニを完全に駆除することは不可能ですので、継続的に駆虫を行わなければなりません。この牧野では、調査での結果を踏まえた駆虫対策プログラム（図1-b）を考え、投与回数を減らし継続可能なプログラムを現在も実施しています。

このように駆虫は継続的に行うものであり、駆虫薬は高価なものが多いため費用がかかります。農場ごとの問題に応じて、より少ない投与回数で最大限の効果を得られるような駆虫プログラムを考え、継続的に行うことが大切です。これを機に駆虫について考えていただけたら嬉しいです。

今回は放牧牛に対しての駆虫についてお話ししましたが、放牧を行っていない舎飼いの牛でも寄生虫に感染する可能性はありますので、毛ヅヤが悪い、子牛の下痢が多い、牛群全体が小さい、繁殖成績が改善しない、疥癬ダニやシラミの感染があるなどのお悩みがある方は寄生虫が原因に

なっているかもしれません。一度獣医師に相談してみてください。

